

2011年(平成23年)4月5日(火)

21 **社会3** 京都新聞 第3種郵便物認可

酵素作用し、抗がん剤効きにくく

妨害メカニズム解明

最もよく使われる抗がん剤のひとつ「シスプラチン」の効果を妨げるメカニズムを、京都大医学研究科の廣田耕志准教授と大学院生の山本君代さんらのグループが解明した。シスプラチンを効きやすくする薬剤の開発につながる成果だという。米国

京大グループ

科学アカデミー紀要で5日発表する。

シスプラチンをはじめとする抗がん剤はがん細胞をはじめとした体細胞のDNAを傷つけ、細胞死に導くことで効果を発揮する。しかし体細胞にはDNA

薬の効果増大に期待

の傷を修復する力もあり、抗がん剤の効果を弱めている。

廣田准教授らはシスプラチンによって傷ついた細胞が傷を除く酵素Fan1など複数の酵素で修復されることを既に確認しており、今回、別の酵素S1x4も修復に関与していることを見つけた。S1x4の働きを抑えると、DNA修復の力が落ち、細胞死の割合が増えた。廣田准教授は「副作用を考える必要があるが、Fan1とS1x4の阻害薬が開発できれば、シスプラチンによるがんの治療効果を高めることにつながるのではないか」と話す。

(松尾浩道)